

学位論文題名

日本近代考古学思想における「先史」の概念に関する研究

－ E.S.Morse 著『大森介墟古物編』(1879年)から
鳥居龍蔵著『有史以前乃日本』(1918年)まで－

学位論文内容の要旨

本論文は、アメリカ人生物学者の E.S.Morse 著『大森介墟古物編』(1879 [明治 12] 年) から日本人の人類学・考古学者の鳥居龍蔵著『有史以前乃日本』(1918 [大正 7] 年) までの約 40 年間に出版された 5 冊の考古学の著作並びに関連する文献を主に取り上げて、「先史」という思考空間が当時の日本社会の中でどのように形成され、また変容したのかという視点から考察したものである。明治期、大正期における「先史」に関する時代概念の受容過程を、通常の考古学史としてではなく、思想史として取り扱ったところに最大の特色がある。

序章では、まず第一節「基礎概念の説明」で、「日本考古学」「近代」「先史」「思想」「思想史」という本論文のキーワードになる用語・概念の内容を反省的に捉え直す。続く第二節「日本考古学史研究の主流」では、従来の日本考古学史研究には 2 つの系譜、すなわち資料集成や学史上の基礎的事項(発見・発掘調査・先駆的研究など)の整理を行う第一の系譜と各時期に展開された考古学研究の実践を社会・政治・経済等との関係において積極的に評価する第二の系譜とがあることを確認し、それぞれの問題点を整理する。そして、本論文で採用すべき方法として、発見史・思考史・研究法史の三者の相互関係を整理しながら主題へアプローチする「弁証法的学史論」を目指すことが明らかにされる。特に重要な主題として、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代といった現在使用されている時代概念を前提として日本考古学史を記述するのではなく、これらの時代概念自体やその歴史認識が生じてくるプロセスを含めて、近代日本考古学の全体的流れを「思想史」という観点から検証することが述べられる。

第一章では、明治の初期に大森貝塚を発掘し、その成果をまとめた E.S.Morse 著『大森介墟古物編』(1879 年) が主に取り扱われる。Morse は当時の日本に進化論を初めて伝えた人物でもあるが、そのことが大森貝塚の発掘成果とあいまって、学界のみならず当時の市井の人々にも大きな関心をもたらす結果となった。また、大森貝塚の発掘調査は、日本における近代科学としての考古学の出発点とする評価が定着しているが、そのことよりも Morse が三時代法で大森貝塚を評価したことによって、日本列島がヨーロッパの先史考古

学者によって作り上げられた「先史」という思想的な枠組みに初めて取り込まれるようになった点の重大性が指摘される。

三時代法の受け入れには当時の知識人の学問的、社会的な背景、立場によって大きく異なっており、国学者の代表として黒川真頼、江戸期の博物学的な知識人の系譜に属する松森胤保、蘭学を背景とする神田孝平を例にして、記紀に基づく旧来の歴史観、神話観と利器の素材に準拠して時代区分を行う三時期法とのすり合わせがいかになされたのかが克明にたどられている。結果として、当時の日本社会では三時代法における「石器時代」が比較的すんなりと受け入れられたのに対して、「先史」という概念、用語が未だ正しく理解されることがなかった実態が明らかにされる。

第二章では、三宅米吉による『日本史學提要』（1886年）が検討の対象となる。Morseの大森貝塚も研究成果は、はからずも「石器時代人民論争」として展開されるが、その中で「石器時代」という用語、言葉の歴史認識は、急速に日本社会に浸透していく。そのような動静の中で、三宅は日本歴史を「神代」から語るのではなくて、それに代わって、本来異なる思想的な系譜の「太古」と「有史以前」とを融合させて、「太古有史以前」という独特な用語を準備して、議論を展開する。ただし資料としての記紀の記述を否定したわけではなくて、歴史的な事実が神話として語られたとするユーヘメリズム的な解釈の域を本質的に脱するものではなかった点が論じられる。

なお、本章での主題を検討する過程で、日本語文献において『日本史學提要』が、三時代法をもって日本列島の各地で発見された考古資料を分類した初めての書であること、また、以後長らく石器時代の年代観として信じられてゆく「石器時代三千年前説」が、坪井正五郎から始まるという日本考古学史上の通説に対して、『日本史學提要』におけるその提示が年代的にさかのぼる点などを、適宜明らかにしている。

第三章では、八木奘三郎の『日本考古學』（1902年）が分析対象となる。この著作は、19世紀後半のヨーロッパ考古学における時代区分を参考として、「先史時代」「原史時代」「歴史時代」という文字（文献）資料の出現を基準とする区分法を採用すると同時に、「古墳時代」という新たな時代概念を導入したものであり、これが大枠においては現代の歴史認識における時代区分の基礎となっていることが明らかにされる。八木は古墳という特殊な墳墓を基準として時代概念を提起して、「石器から金属器へ」といった三時代法の継起的な技術変遷史観を超越する一方で、本来、三時代法の時代概念である石器時代を単独な時空間として成立させることになる。その結果生じた時代区分の基準の一貫性の欠如を補うものとして、文献の存在に準拠する「先史時代」「原史時代」を導入する思考的過程が丹念にたどられている。さらに、八木の用いる先史時代は彼の師であった坪井正五郎の石器時代の内容を引き継ぐものであり、原始時代に相当する古墳時代との間には、系譜的つながりがない点、すなわち時間的な間隙が介在する点が強調されており、八木の『日本考古學』が明治期の「石器時代人民論争」の思想史的な限界を超えられなかったことも的確に論じられる。

第四章では、N.G.Munroの*Prehistoric Japan*（1908年）が取り扱われる。この著作は、従来、日本考古学において旧石器文化の存否の問題を最初に取り扱ったものとして評価さ

れるだけにとどまっていた。しかし、この書物が本論文の主題である「先史」という思考空間の形成過程を論じるうえで、欠くことのできない重要な位置を占めることが明らかにされる。八木においては実現できなかった先史時代（石器時代）と原史時代（古墳時代）との接続を、Munro は独自の用語である「原始文化」と「ヤマト文化」として接続し、さらに当時認識され始めた弥生文化ないしは青銅器文化をヤマト文化の初期段階として位置づけている点で、八木の『日本考古學』を乗り越えようとする試みがそこから読み取られる。ただし、先住民と後続して進出してきた民族との交代を前提とする、明治期の人類学・考古学界で広く受け入れられていた「交換パラダイム」を基本的には踏襲する点において、八木と同じ限界性も確認されることになる。

第五章では、鳥居龍蔵の『有史以前乃日本』（1918年）が検討され、その主要な概念である「固有日本人」が形成される過程が、鳥居の半生の調査・研究活動との関連で明らかにされる。固有日本人とは、弥生文化を担った人々のことであり、ここに至ってようやく、日本人（大和民族）にも石器時代があったことが公然と言及されることになる。

鳥居の学説は固有日本人説としてこれまで取り扱われてきたが、本論での議論の主旨を踏まえるならば、それを「有史以前論」として再評価することによって、鳥居の膨大な研究業績の全体との関連が明確になる点が明示される。

以上の論証の過程で、鳥居とMunroとの間で交わされたドルメンに関する議論の応酬を、新たに「ドルメン論争」として、学史上の一エピソードとして摘出する。また、鳥居の固有日本人説が形成される年代については、通説となっている年代に誤りがあることを指摘し、成立過程の詳細が議論される。

結語では、以上に論じてきた各章の論点が要約され、今後、研究をさらに深めるべき点の提示がなされる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 小 杉 康
副 査 准教授 加 藤 博 文
副 査 准教授 川 口 暁 弘

学 位 論 文 題 名

日本近代考古学思想における「先史」の概念に関する研究

－ E.S.Morse 著『大森介墟古物編』（1879年）から
鳥居龍蔵著『有史以前乃日本』（1918年）まで－

平成 20 年 12 月 19 日文学研究科教授会の承認のもと、上記 3 名をもって本論文の審査委員会を組織し、口頭試問並びに 5 回の審査を行った。

- 平成 20 年 12 月 19 日 第一回審査委員会
申請論文の複写を各審査委員に配布し、概要・体裁の確認、今後の審査日程の調整をおこなう。
- 平成 21 年 1 月 28 日 第二回審査委員会
論文内容の検討と問題点の整理を行い、口頭試問の進め方を決める。
- 平成 21 年 1 月 30 日 口頭試問
- 平成 21 年 1 月 30 日 第三回審査委員会
口頭試問の内容を検討し、問題点の整理と評価をおこない、学位授与を判定する。
- 平成 21 年 2 月 6 日 第四回審査委員会
審査結果報告書（案）の検討と確認をおこなう。
- 平成 21 年 2 月 9 日 第五回審査委員会
審査結果報告書原案を主査が準備し、それを各委員が検討し、合議のうえ加筆訂正をおこない、最終案を作成する。

以下に、本論文の評価を述べる。

本論文は、明治期から大正期にかけての考古学史を、「先史」という思考空間が形成される過程として検討しており、考古学史研究に新たな研究領域を開拓するとともに、そこで論じられ明らかにされた思想史的内容は、現在の考古学者が前提とする時代概念にも再

考を促す成果が得られており、高く評価できるものである。本論文で取り扱った著作は、日本列島にも三時代法の石器時代が存在することを明らかにした Morse 著『大森介壚古物編』(1879年)、「神代」から始まる日本歴史のはじまりを「太古有史以前」として神話から離脱させた三宅米吉著『日本史學提要』(1886年)、先史時代(石器時代)との間に時間的・系統的な断絶期間を挟んで古墳時代という独自の時代概念を提示した八木槎三郎著『日本考古學』(1902年)、さらに原始文化とヤマト文化とを時間的に接続させた Munro 著 *Prehistoric Japan* (1908年)、そして「日本人」の祖先においても石器時代が存在したことを論じた鳥居龍蔵著『有史以前乃日本』(1918年)というものであり、論文主旨の「先史」という思考空間が形成される過程を探究するために最良の選定がなされているといえる。特に、いずれもヨーロッパにおける研究によって提示されたものであるが、利器の原材料を基準とする三時代法の石器時代・青銅器時代・鉄器時代と、文献の出現を基準とする先史時代・原史時代・歴史時代とが当時の日本で受け入れられる際の微妙な違いを明らかにすることに成功している。

なお、審査の過程では「結語」において、用語としての「先史」がいかに受容され、あるいは拒絶されたかについての総括的な記述、評価が必要であるとする点が指摘された。しかし、本論文の主旨は用語問題としての結論を導き出すものではなく、「先史」という思想空間が形成される過程の検討が、新たな見解、発見を含めて各章で重厚に記述されており、その点を積極的に評価することになった。ただし、「先史」が用語の問題として全面的に議論されている記述も何か所かで見受けられるので、その点に関しての記述方法の検討、並びにそれに関する論考の深まりを今後の課題として指摘しておく。

本審査委員会は、以上の審査結果に基づき、全員一致して本申請論文が博士(文学)の学位を授与されるのに妥当であるとの結論に達した。